



仕事観を振り返る

東海東京証券
代表取締役会長

佐藤 昌孝

昨年11月、脚本家の山田太一氏の訃報を聞いて、昔の自分を思い出した。中学生の頃、世界の子供から飢えをなくす仕事で世の中の役に立つというのが自分の天命だという思いを抱いていたが、高校生になる頃には日本の古典や漢文の世界、そして「人間とは」という問いにはまり、物書きの仕事をしたという思いに変わっていった。ただ、好きなことの延長で仕事を考えるのはどうなのかと悶々と悩んでいた時に、山田先生脚本のTVドラマ「男たちの旅路」を見て、感動し思いを抑えきれず先生の弟子になろうと決心した。弟子入り懇願の手紙を短編の自作とともにお送りしたが、返事は来なかった。ショックではあったが、冷静に考えたら自分の才能では物書きで生計を立てるのはやはり無理だろうとあきらめた。その後の自分の文才の成長度を考えれば、残念ながらこれは正解だった。

将来への方向性を見定められないまま大学に入ったものの、受験勉強からの解放感が過ぎて学校に行かない日々を繰り返し、明確な仕事観を見つけられないまま銀行に就職した。入行店の支店長の一言「これからは世界を相手にする時代だ。まずは留学の準備をせよ。」で一念発起し24歳で米国のMBAに挑戦した。Japan as No.1の時代である。英語とプレッシャーに苦しんだが何とか踏ん張り、苦難に耐えられる自信が付き、自分の中の価値観も多様化したと思う。

30歳頃から、仕事にのめりこみ、趣味を尋ねられれば、「ゴルフと旅行」と答えつつ、心の中では「仕事」と答える企業戦士となった。様々な課題・困



難を乗り越えていくことに喜びを感じる日々であった。本社勤務が長かったが、念願叶い現場の支社長を拝命したのはリーマンショックの時。お客様の売上げが7割減の苦境にある中、副頭取の一言が私の脳を直撃した。「今お客様のお役に立たないで、いつお役に立つんだ！」

そうだ、当たり前のことではあるが、お客様のお役に立つことが自分の求めていた仕事だと覚醒した。それ以来、経営の立場に立っても社員の皆さんに「お客様のお役に立つ」という姿勢の徹底をお願いし、浸透してきたように思う。最近は社会のお役に立つことも心掛けている。

社員の皆さんが、笑顔でわくわくしながら誇りをもってチャレンジし成長し、結果として会社の徳を高めていくことが足もとの自分の仕事だと思っている。一段落したら、微力ながら世界の子供たちの役に立つ仕事をしてみたい。